目次

はじめに
——「ALWAYS 三丁目の夕日」から「無縁社会」へ……1
第1章　集団就職の時代……13
第2章　テレビの時代……47
第3章　六子の結婚……59

第4章　高度経済成長期の社会……69
1　家族の戦後体制　69
2　雇用の戦後体制　78
3　住宅の戦後体制　88
第5章　一億総中流社会――安定成長期の社会……107
第6章　失われた三〇年……133
第7章　家族のポスト戦後体制――第二の近代社会へ（その一）……159
第8章　雇用のポスト戦後体制――第二の近代社会へ（その二）……179

1　雇用の変容　179
2　第二の近代家族——直美の場合　185
3　ロストジェネレーション——誠の時代　205

第9章　地域の変容——第二の近代社会へ（その三）……235

おわりに——第二の近代社会を生きる……253

参考文献　267
図表一覧　270
索　引　278

著者紹介

浜　日出夫（はま　ひでお）

東京通信大学情報マネジメント学部教授、慶應義塾大学名誉教授。

一九五四年福島県生まれ。一九八〇年大阪大学大学院人間科学研究科博士課程中途退学。

主著に、

『社会学の力――最重要概念・命題集〔改訂版〕』（共編）有斐閣、二〇二三年

『サバイバーの社会学――喪のある景色を読み解く』（編著）ミネルヴァ書房、二〇二一年

『社会学〔新版〕』（共著）有斐閣、二〇一九年　など。

はじめに――「ALWAYS 三丁目の夕日」から「無縁社会」へ

「無縁社会」

二〇一〇（平成二二）年一月三一日に放送されたＮＨＫの番組「無縁社会――〝無縁死〟三万二千人の衝撃」からこの話を始めることにしよう。

この番組は、二〇〇九（平成二一）年一年間に「ひとり孤独に亡くなり引き取り手もない死」――これをＮＨＫは「無縁死」と名づける――が三万二千人あったことを報じたものである。これはこの年の死亡数一一四万一八六五人の約二・八％に当たる。とりわけＮＨＫは、この三万二千人のうち、身元のわからない約千人を除く約三万一千人が、身元が判明しているにもかかわらず誰にも引き取られず、自治体の手で火葬・埋葬されたことに注目して、そのような社会のあり方を「無縁社会」と名づけた。[1]

二〇〇八（平成二〇）年九月にリーマン・ショックが起こり、翌〇九年の実質経済成長率がマイナス

五・四％に急落、失業者が三〇〇万人を超える（失業率五・一％）という暗い世相を背景に放送されたこの番組は大きな反響を呼んだ。それは、「無縁社会」がこの年の「新語・流行語大賞」のトップテンの一つに選ばれていることからもわかる。誰かの手からすり抜けてしまった赤い風船が低く雲が垂れ込めた空に向かって昇っていくタイトルバックと陰鬱な音楽が繰り返されるこの番組は、あたかも戦後日本社会の葬送曲のようであった。

「無縁死」三万二千人を多いとみるか、少ないとみるか、感想はさまざまだろうが、九七・二％の人は誰かに看取られ葬られていることを考えれば、この社会全体を「無縁社会」と呼ぶのはやや誇張のように思われる。しかし、「無縁死」三万二千人をどうとらえるかは別として、この番組は興味深い現象を引き起こしていた。それは、この番組の放送直後から、ＳＮＳ上で「無縁社会、他人事でないなぁ」「このままいくと、私も無縁死になる」といった書き込みが相次いだことである。しかもその多くが三〇代、四〇代の書き込みであった（ＮＨＫ「無縁社会プロジェクト」取材班編『無縁社会』二一二頁）。

現代社会では単身で暮らす高齢者が増えている。二〇一〇年の国勢調査によれば、六五歳以上の高齢者で単身で暮らす人は約四七九万人、高齢者全体の一六・四％であった。一人暮らしの高齢者がこの番組を見て「他人事ではない」と感じるのは当然である。しかし、三〇代、四〇代といえば、まだまだ若く、死を差し迫ったことと感じないのがふつうだろう。その三〇代、四〇代の人たちがこの番組を見て「他人事ではない」と感じたということは、「無縁死」が三万二千人あったということ以上に、この社会のありようを鮮明に映し出している。そして、これら三〇代、四〇代の人たちの反応も含めれば、この

ような社会のあり方はたしかに〈無縁社会〉と言ってよいものだろう。

今年（二〇二三年）は戦後七八年を迎える。僕たちはどこから来て、どこをどうたどって、このような社会にたどりついてしまったのか、この本では一人の女性の人生を追いながら戦後日本社会の歩みをたどってみることにする。

「ALWAYS 三丁目の夕日」

その女性の名前は星野六子（むつこ）、映画「ALWAYS 三丁目の夕日」（山崎貴監督）の主人公である。一九五八（昭和三三）年の東京を舞台とするこの映画は二〇〇五（平成一七）年に公開され、観客動員数二七〇万人の大ヒットとなった。その後もテレビで何度も放送されており、見たことのある人もいるだろう。

六子は一九五八年、青森県の中学校を卒業と同時に、集団就職列車に乗って、東京にある自動車修理工場鈴木オートに就職する。五八年はちょうど高度経済成長が始まったばかりのころである。映画は六子と戦後日本社会の未来を祝福するような明るい音楽で彩られ、貧しかったけれども夢と希望にあふれ

1　ＮＨＫの調査は一回限りであったが、二〇二三（令和五）年三月、総務省は全国の自治体を対象とした「引取者のない死亡人」の発生状況についての調査結果を公表した（総務省「遺留金等に関する実態調査　結果報告書」）。「引取者のない死亡人」はＮＨＫのいう「無縁死」と同じである。それによれば、一八（平成三〇）年四月から二一（令和三）年一〇月の間に「引取者のない死亡人」は一〇万五七七三人、うち身元のわからない人が二八五二人である。三年半で約一〇万六千人ということは、平均すれば一年約三万人で、一〇年で大きな変化はない。二一年の死亡数が一四三万九八〇九人と増加しているので、死亡数に占める割合は低下している（約二・一％）。

ていた社会を描いている。それから約五〇年を経て、時代は〈無縁社会〉へと変貌する。

「ALWAYS 三丁目の夕日」から〈無縁社会〉への約五〇年間の日本社会の変化を、六子とその家族のありえたかもしれない人生をたどりながらみていくことにしよう。

登場人物

はじめにこの話の登場人物を紹介しておこう。[2]

六子　六子は一九四三（昭和一八）年一〇月二一日に青森県北津軽郡板柳（いたやなぎ）町で父新吉の三女として生まれる（鈴木オートの社長鈴木則文が六子の荷物を道に放り出したとき、そこに入っていた履歴書にそう書かれていた）。そして、いま述べたように五八年三月中学校を卒業すると、集団就職列車に乗って、鈴木オートにやってくる。しかし、じつは計算が合わない。六子は遅生まれなので、中学校卒業は五九年のはずである。ここでは映画に合わせて話を進めることにしよう。そして、六八（昭和四三）年三月、勇[3]と結婚、翌六九（昭和四四）年八月、第一子・直美[3]が誕生、七二（昭和四七）年三月、第二子・誠[3]が誕生する。

勇　六子の夫。一九四一（昭和一六）年一月生まれ。五六（昭和三一）年中学校を卒業し高校に進学。五九（昭和三四）年高校を卒業して就職。六八年三月、六子と結婚。

直美　六子と勇の長女。一九六九年八月生まれ。八八（昭和六三）年高校を卒業して短大に進学。九〇（平成二）年短大を卒業して就職。九五（平成七）年一二月、健一[3]と結婚。九七（平成九）年七月、第

一子・明日香[3]が誕生。二〇〇〇（平成一二）年二月、第二子・翔[3]が誕生。

誠　六子と勇の長男。一九七二年三月生まれ。九〇（平成二）年大学に進学、九四（平成六）年卒業。

明日香　直美と健一の長女。一九九七年七月生まれ。

翔　直美と健一の長男。二〇〇〇年二月生まれ。

そして、この時代を生きた無数の「六子」たちや「勇」たち、「直美」たちや「誠」たち、「明日香」や「翔」たちもまたこの話の登場人物である。僕もそのなかの一人である。僕は一九五四（昭和二九）年生まれ、六子より一〇学年下である。僕もまたこの時代に生まれ、この時代によって作られ、またこの時代を作ってきた、この時代の子である。この時代を語るとき僕自身の記憶を織り交ぜて語ることもあるだろう。

時代区分

六子はどんな時代を生きたのだろうか。それは、戦後の混乱期を除いて、大きく三つの時期に分けら

2　なお、六子以外は本書オリジナルの登場人物である。

3　名前は明治安田生命による名前ランキングの各生まれ年の一位。ただし一九六七年生まれの健一は二位。この年の男子の一位も誠だった。

れる。これを国内総生産（ＧＤＰ）の実質成長率の推移でみてみよう（図はじめに-1）。成長率がトントンと階段を二段下りるように低下してきたことがわかる。

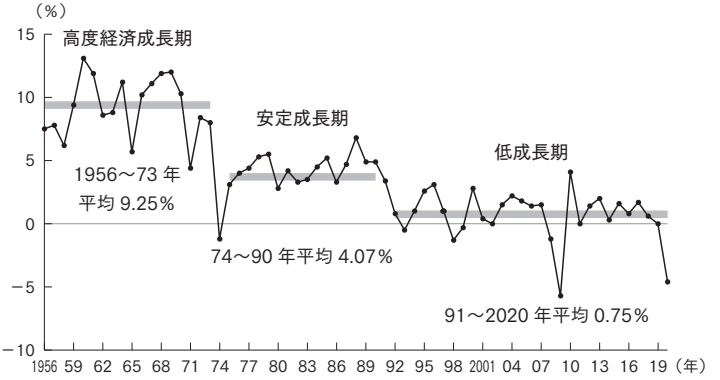
第一の時代は一九五五（昭和三〇）年から始まり、七三（昭和四八）年の第一次オイルショックで終わる高度経済成長期である。この時代の成長率の平均は九・二五％、この間にＧＤＰは五五年の約八兆九千万円から七三年の約一一九兆六千万円へと約一三・四倍に増加する（内閣府「〈令和三年度〉年次経済財政報告」）。

第一次オイルショックによって、一九七四（昭和四九）年の成長率はマイナス一・二％、戦後はじめてのマイナス成長となる。欧米諸国がそのまま低成長期に入ったのに対して、日本はいち早く立ち直り、バブルが崩壊する直前の九〇（平成二）年まで安定成長期が続いた。この期間の成長率の平均は四・〇七％である。九〇年直前の少し折れ線グラフが高くなっているところがバブル経済である。この間にＧＤＰは七四年の約一四三兆円から九〇年の約四六二兆円へと増加する（同）。

そして、バブルが崩壊した一九九一（平成三）年から現在まで続くのが低成長期である。この間の成長率の平均は一％に満たない。ＧＤＰも九一年の約四九二兆円から二〇二〇年の約五三九兆円へとわずかに増加しただけである（同）。「失われた三〇年」である。

六子のようにこれら三つの時代をすべて経験してきた世代もあるだろうし、明日香や翔のように生まれてからずっと低成長期という若者も多いだろう。

図はじめに-1　経済成長率の推移



（注）　1955 年は成長率のデータはない。
（出所）　内閣府「〔令和 3 年度〕年次経済財政報告」より作成。

一身にして三生を経る

六子は今年（二〇二三年）、傘寿（八〇歳）を迎える。まだまだお元気だろう。二〇二〇年国勢調査によれば、女性の平均寿命は八七・七一歳である。六子たちの世代は日本史上、そればかりか世界史上稀有な経験をした世代である。それは高度経済成長という大事件に遭遇したことによる。

原朗は高度経済成長期を二千年前の弥生時代に匹敵すると述べている。

> 高度成長期における経済構造の変化は、農地改革・地租改正・太閤検地などを飛び越えて、はるか二千年前の弥生時代における変化に匹敵するといってもよいと思われる（原朗「戦後五〇年と日本経済」『年報・日本現代史』創刊号、九九頁）。

高度経済成長は日本だけの出来事ではなかった。「黄

金の六〇年代」といわれた一九六〇年代は先進工業国ではどこでも高度経済成長を謳歌していた。世界的な歴史家ホブズボームはこう述べている。

この黄金時代について、今、大きな自信をもって評価できるのは、その中で生じた経済的、社会的、文化的な転換が異様なまでに大きな規模と迫力をもったものだったということである。それは、記録に残っている歴史の上で最大、かつもっとも急速で根本的な転換であった。[……、著者中略、以下著者補足は［　］で示す]二〇世紀の第三・四半期は石器時代の農業の発明とともに始まった七千年、ないしは八千年の歴史の終わりを記したと主張できるであろう。この時代とともに、人類の圧倒的多数が食料を育て動物を養って暮らしてきた長い時代が終わったからである（ホブズボーム『二〇世紀の歴史〔上巻〕』一四―五頁）。

一九六〇（昭和三五）年から七〇（昭和四五）年の日本の実質経済成長率の平均一〇・四％は、アメリカの三・九％、イギリスの二・九％、西ドイツ（当時）の五・三％、フランスの六・〇％をはるかに凌駕していた（三和良一・原朗編『近現代日本経済史要覧〔補訂版〕』四一頁）。「東洋の奇跡」と呼ばれた日本の高度経済成長は世界史的な出来事でもあった。

さらに六子たちの世代の経験を特別なものにしたのは、たんに高度経済成長という出来事に遭遇したためばかりでなく、日本の高度経済成長のペースがあまりに早かったためである。経済学者たちの言葉

を借りよう。

高度成長は誇張でなく、日本という国を根本から変えた。[……] これほど大きな変化が、「昭和」という一つの元号の三分の一にも満たない短い期間、わずか六〇〇〇日の間に生じたことは、考えてみれば驚くべきことである（吉川洋『高度成長』五頁）。

高度成長は、農村から都市へという「民族大移動」を通して国の姿をすっかり変えた。それはまた有史以来の日本の農業を「地すべり」的な衰退へと追い込む過程でもあった（同一二七頁）。

この時期［昭和三〇年代］の日本の重化学工業化は、欧米諸国が半世紀以上の時間をかけ何回かのピークを重ねながら実現してきた到達点を、わずか一〇年くらいのあいだに一挙に圧縮して達成したものである（柴垣和夫「産業構造の変革」東京大学社会科学研究所編『戦後改革8　改革後の日本経済』七七頁）。

一九五〇年代を転機にして、高度成長期には世界史上例をみない都市化現象がはじまった。[……] アメリカが一世紀かかった都市化を、日本はその四分の一の二五年でなしとげた（宮本憲一『昭和の歴史　第10巻　経済大国』七一頁）。

武士として封建社会を生き、明治維新以降は慶應義塾を創設し、教育者・思想家・言論人として近代社会の建設に力を尽くした福沢諭吉（一八三五―一九〇一）は自分の半生を振り返って「一身にして二生を経る」と述べた（福沢諭吉『文明論之概略』一二頁）。これになぞらえれば、六子の人生は高度経済成長に遭遇したこと、そしてそのペースがあまりにも早かったために「一身にして三生を経る」ものとなった。

六子はおそらく高度経済成長期以前の青森の伝統的な家族と村で生まれ育っただろう。これが一生目である。そして、集団就職列車に乗って、これから高度経済成長に向かおうとする東京にやってきて、自分が生まれ育った家族とは異なる近代的な家族を作った。これが二生目である。ホブズボームによれば、「黄金時代」はオイルショックで終わりを告げ、「危機の時代」が始まる。日本は安定成長期をはさみ、欧米諸国から約二〇年遅れて「危機の時代」に突入する。そしていま六子は、自分の子どもたちや孫たちが自分の知らない社会に足を踏み入れていくのを心配そうに見守っている。これが三生目である。

あらすじ

本書のあらすじは以下のとおりである。

第1章「集団就職の時代」では、青森の中学校を卒業して集団就職列車に乗って東京に向かった六子の歩みを追いながら、戦後日本社会の輪郭が作られていく過程を描く。

第2章「テレビの時代」では、次から次に登場する夢を追いかけた「夢の時代」であったと同時にさ

まざまな公害も生んだ高度経済成長期の明暗を描く。

第3章「六子の結婚」では、東京にやってきた六子が勇と結婚してどんな家族を作ったかをみる。

第4章「高度経済成長期の社会」は家族・雇用・住宅に焦点を当てて高度経済成長期の社会の特徴をみていく。第1節「家族の戦後体制」では高度経済成長期の家族の特徴をみる。高度経済成長期には、みんなが結婚し、二、三人の子どもをもち、夫が一家の生活を支え、妻が家事・育児を担う家族を作った。第2節「雇用の戦後体制」では、夫が一家の生活を支えることができた背景には戦後確立された「日本的経営」があったことをみる。これが、「モーレツ社員」の夫と専業主婦の妻からなる近代家族を可能とした。第3節「住宅の戦後体制」では近代家族の容れものとなった団地をみる。

第5章「一億総中流社会」では、オイルショックから立ち直ったあとバブル崩壊まで続く安定成長期の社会の特徴をみる。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の時代である。この時代は、高度経済成長期に骨格が作られた日本の近代社会が完成された姿を現すと同時に、その足元で次の時代への移行の前兆が始まっていた時代であった。

第6章「失われた三〇年」は、バブル崩壊後の社会の変容を流行語を手がかりとしてみていく。

第7章から第9章は直美と誠が歩んだかもしれない人生をたどりながら、バブル崩壊後の「第二の近代社会」の特徴をみていく。

まず第7章「家族のポスト戦後体制——第二の近代社会へ（その一）」では直美と健一が作った家族をみる。家族は多様化し、もはやみんながみんな結婚するわけではないし、結婚してもみんながみんな二、

三人の子どもをもつわけではない。

第8章「雇用のポスト戦後体制――第二の近代社会へ（その二）」では、「第二の近代社会」では女性も男性と同じように働く時代になったことをみる（第1節）。女性の働き方の特徴をみると同時に、「男女雇用機会均等法」（一九八五年）がなぜ女性の働き方を変えることに失敗したのか考えてみる（第2節）。誠が大学を卒業したときにはすでに就職氷河期が始まっていた。誠たちはみんながみんな勇のように就職し働くことができたわけではなかった（第3節）。

第9章「地域の変容――第二の近代社会へ（その三）」では現在の日本列島の風景からいくつかを点描する。

「おわりに――第二の近代社会を生きる」では、これから「第二の近代社会」を生きていく明日香と翔にエールを送りたい。

これが本書のあらすじであるが、できれば「ALWAYS 三丁目の夕日」をあらかじめ見ておいていただければ少しリアリティが増すかもしれない。また注を煩雑に感じられれば飛ばして読んでいただいてもかまわない。

それでは「一身にして三生を経る」という稀有な経験をした六子の歩みをたどりながら戦後日本社会の変遷を追っていくことにしよう。

第1章

集団就職の時代

青森県板柳町

「はじめに」で紹介したように、六子は一九四三（昭和一八）年一〇月二一日に青森県北津軽郡板柳町で父新吉の三女として生まれる。「上に五人いた」と言っているので、六子という名前のとおり、三男三女の六番目として生まれたのであろう。もしかしたら下にまだ弟妹がいるかもしれない。家はおそらく農家だろう。それも、六子は「口減らし」で家を出されたと信じ込んでいるので、豊かな部類の農家ではなかっただろう。

板柳町は弘前市に隣接する実在の町である。津軽平野の中央、岩木山の東麓に広がるリンゴ栽培を中心とする農業地帯である。人口は、六子が東京に出る直前の一九五五（昭和三〇）年の二万二二五七がピークで、その後は減り続け、二〇二二（令和四）年には一万二九三一となっている。

第2章

テレビの時代

東京タワー

「ALWAYS 三丁目の夕日」のもう一つの主人公は東京タワーである。

上野駅で六子を迎えた則文の運転するオート三輪が鈴木オートへ向かっている道路[1]の背後には、五分の一ほど建ちあがった東京タワーが姿を見せていた。

1　その道路には都電が走っていた。タイトルバックでは、都電三系統（品川駅前―飯田橋）の飯田橋行が東京タワーを正面に見て、都電八系統（中目黒―築地）の中目黒行が東京タワーを背にしてすれ違うところが出てくる。当時の路線図（図2-1）を見ると、東京タワーを背景にしてこのような形で都電三系統と八系統がすれ違う可能性があるのは赤羽橋―飯倉四丁目間の桜田通り（現在の都営地下鉄大江戸線赤羽橋駅北側）だけである。鈴木オートがあったのはこの付近だったと思われる。

第3章

六子の結婚

「クリスマスケーキ」

ここまで「ALWAYS 三丁目の夕日」にしたがって六子の歩みを追ってきた。「ALWAYS 三丁目の夕日」は一九五八（昭和三三）年四月から一二月までの物語である。その後のことはわからない。ここから先はさまざまなデータを用いて六子のありえたかもしれない人生を再構成してみよう。まずは六子の結婚[1]である。

表3-1は一九六〇年代の平均初婚年齢を示した表である。六〇年代を通して、妻は二四歳台、夫は二七歳台である。当時、女性の結婚適齢期は「クリスマスケーキ」にたとえられた[2]。二四日を過ぎると売れないという意味だった。

平均的なライフコースにしたがえば、六子も一九六八（昭和四三）年に二四・四歳で結婚したと考え

第4章

高度経済成長期の社会

1　家族の戦後体制

近代家族

この章では、六子たちが新しい生活へと踏み出した高度経済成長期の社会の特徴をみていく。

まず高度経済成長期の家族の特徴をみてみよう。六子と勇が「標準世帯」と呼ばれる家族を作ったことはすでに述べた。社会学ではこれを「近代家族」と呼んでいる。

ここでは近代家族の特徴として四つ挙げておく。

①夫婦と未婚の子どもからなる核家族である。

第5章

一億総中流社会——安定成長期の社会

オイルショック

高度経済成長期は一九七三（昭和四八）年に起きた第一次オイルショックで突然終わりを告げた。この章では、オイルショック後の安定成長期の日本社会についてみていこう。この時代は、高度経済成長期に骨格が作られた日本の近代社会が完成された姿を現すと同時に、その足元では次の時代への移行の前兆が始まっていた時代でもあった。

その前に、高度経済成長期の後半に起こった出来事を振り返っておこう。

一九六四（昭和三九）年の東京オリンピック開催とその翌年の不況についてはすでに触れた。この不況を乗り切ると、翌六六（昭和四一）年から「いざなぎ景気」が始まり、七〇（昭和四五）年まで五年間にわたって実質経済成長率が一〇％を超えた。日本の国民総生産は六六年にイギリス、六七年にフラン

第6章

失われた三〇年

流行語

流行語は新しく現れた現象に名前を与えたものである。それは社会の体調の変化をいち早く知らせる体温計のようなものである。社会科学はデータがなければ何も言うことができないので、社会科学者がデータを集めて、体調の変化の原因を特定して、診断を下すためにはどうしても時間がかかる。しかし、社会はせっかちなので、そんなにゆっくり待ってくれない。とりあえず名前を付けて、新しく現れた現象を理解しようとする。それが流行語である。名前さえわかれば、よく理解できなくてもとりあえず安心することができる。「あそこの息子さんは学校を卒業した後もちゃんと就職していないみたい」とか、「あそこの娘さんは三〇歳過ぎてもまだ家にいるみたい」というような現象が現れたとき、「フリーター」とか「パラサイト・シングル」という言葉があれば、「ああフリーターね」とか「ああパラサイト

第7章

家族のポスト戦後体制——第二の近代社会へ（その一）

直　美

六子は青森の伝統的社会で生まれ育ち、集団就職で東京にやってきて、勇とともに近代家族を形成した。そして、六子はいま、自分たちが作った近代家族で生まれ育った子どもたちが、バブル崩壊後の「第二の近代社会」で、自分たちが歩んだ人生とは異なる人生を歩んでいるのを心配そうに見守っている。ここからは、六子の子どもたち、直美と誠が生きている「第二の近代社会」の特徴についてみていこう。

まず直美のプロフィールをもう一度振り返っておこう。直美は一九六九（昭和四四）年八月、高度経済成長末期のいざなぎ景気のなかで生まれた。大阪万博の前年である。そして八八（昭和六三）年、バブルのまっただ中、高校を卒業して、短大に進学した。「文部科学統計要覧〔令和三年版〕」によると、

第8章

雇用のポスト戦後体制——第二の近代社会へ（その二）

1　雇用の変容

雇用のポスト戦後体制

第二の近代社会における雇用のあり方をよく表しているのは、すでに述べたように、従業上の地位別就業者の比率の推移を示した図6-1（一五四頁）と、正規雇用者と非正規雇用者の比率の推移を示した図6-2（一五五頁）である。この二つの図は、一方で戦後、近代化が進行し、自営業者の比率が低下し雇用者（サラリーマン）の比率が増加してきたこと（雇用者化）、他方で「失われた三〇年」において、雇用者のうち、正規雇用者（正社員）の比率が低下し、パートタイマー・アルバイト・派遣社員など非正

第9章

地域の変容——第二の近代社会へ（その三）

高度経済成長期以後の人口移動

最後に地域の変容をみておこう。

戦後、地方から大都市圏への人口移動には三つの波があった。第1章でみたように、第一の波は高度経済成長期の「民族大移動」である。高度経済成長が始まる一九五五（昭和三〇）年から、それが終わる七三（昭和四八）年までの間に、六子も含め、約八四九万人が地方から三大都市圏に移動した。

その後も若者たちは就職や進学などのために都市をめざした。**図1-3**（三〇頁）をもう一度みてみよう。

一九七三年の第一次オイルショックによって高度経済成長は終わりを告げ、翌七四年の経済成長率は戦後初のマイナス成長（マイナス一・二%）となった。これによって地方から大都市圏への人の流れもい

戦後日本社会論――「六子（むつこ）」たちの戦後
Social Theory of Postwar Japan: The Journey of "Mutsuko" and the Others

2023 年 11 月 25 日 初版第 1 刷発行

著　者　浜 日出夫
発行者　江草貞治
発行所　株式会社有斐閣
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17
https://www.yuhikaku.co.jp/
装　丁　CaNNNA
印　刷　大日本法令印刷株式会社
製　本　大口製本印刷株式会社
装丁印刷　株式会社亨有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
©2023, Hideo Hama.
Printed in Japan. ISBN 978-4-641-17492-4

本書のコピー，スキャン，デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは，たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

JCOPY 本書の無断複写（コピー）は，著作権法上での例外を除き，禁じられています。複写される場合は，そのつど事前に，（一社）出版者著作権管理機構（電話03-5244-5088，FAX 03-5244-5089，e-mail:info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。